

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：55101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07401

研究課題名（和文）古代日本語引用助詞の記述的研究

研究課題名（英文）A descriptive study of quotative particles in Earlier Japanese

研究代表者

辻本 桜介（辻本桜介）（Tsuji moto, Osuke）

米子工業高等専門学校・その他部局等・助教

研究者番号：90780990

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古代語の引用助詞「と」「とて」「など」の3種の持つ文法的な働きを記述した。まず、「と」が「無し」に係る構造、「と」に指定辞「なり」が後接する構造について分析し、さらに、「聞く」「いらふ」「答ふ」などの動詞と共起する場合の意味的な構造も明らかにした。また、「とて」については、従来の研究で同義とされてきた「と言ひて」「と思ひて」等との相違点を明らかにし、「など」については、共起する述部の語彙的な傾向を観察することによって、その意味的な機能を記述した。

研究成果の概要（英文）：In this research, I described the functions of three quotative particles, to, tote, and nado in Earlier Japanese. First, I analyzed the syntactical construction of to-nashi and to-nari, the forms which are not used in Modern Japanese. Meanwhile, I also described the semantic construction of to-kiku, to-irau and to-kotau. In addition, I found that tote has several functions which to-iite and to-omoite don't have, and that nado has a particular semantic function which affects the choice of the predicate verb.

研究分野：日本語学

キーワード：「と」「とて」「など」 引用助詞 「となし（無し）」 「となり」 古代語 中古語

1. 研究開始当初の背景

現代語の引用助詞の研究は1980年代に増加し、2000年の藤田保幸『国語引用構文の研究』が最も精密な研究成果を示している。2000年代は他に鎌田修、小野正樹、中園篤典、杉浦まそみ子、山口治彦、加藤陽子も引用助詞に関する著書を公表しており、現状、現代語の引用助詞に関わる文法的問題は、極めて精緻に解明されている。

一方、古代語の引用助詞は現代語と異なる構造で用いられる例がしばしば見出されるが、殆ど言及されることが無い。

2. 研究の目的

次の3点を記述することで、古代語における引用助詞が持つ文法的性質を明らかにする。

- (1) 「～と 述語」の基本構造
- (2) 使用頻度の高い表現「～と 聞く」等の意味構造。
- (3) 「と」を構成要素とする引用助詞「とて」「など」(複合辞)の意味・機能

3. 研究の方法

古代語には現代語の「～と 述語」という形では許容されない用法の例が散見される。現古の相違があるならば、逆に、現代語の「～と 述語」ならばありうる用法の一部が、古代語の用例で見出せない可能性もある。本研究では第一に、基本的な古代語資料の「と」の全数調査を行い、現代語と対照する形で古代語の「～と 述語」の諸用法を記述する。

次に、「とて」の意味・機能の記述を行う。特に、前接する要素の種類によって場合分けを行い、それぞれの用法を観察し記述していく。

「など」の意味・機能については、従来“婉曲的に語句を引用する”という不明確な説明がなされるのみである。「～と」の用法との相違点に着目しながら、「～など」において引用される語句の性格、及び「～など」を受ける述語句の語彙状況を観察し、意味・機能を記述する。

4. 研究成果

(1) 「～と」について

古代語の「～と」は指定辞が後接して「～となり」という形を作るが、現代語にはこれに対応する形が無い。この形の用例を収集・分析した結果、基本的に「人物の行為を表す名詞句 + その人物の動機の内容を示す文 + トナリ」という構造で用いられることが分かった(発表論文)。

次に、「～と」を形容詞「無し」が受ける構造が生産的に用いられる点に着目した。用例の収集・分析の結果、「～となし」の「～と」は、ある事態が一般にどのように認められるかを、「～と思われそうな様子で」のような意味を持つ引用句で示したものであることが分かった(発表論文)。現象の記述

としては以上の通りであるが、指定辞や「無し」との共起によって、なぜそのような表現性を生じるかについての考察は今後の課題である。

一方、具体的な述語動詞の意味との相関を観察するケーススタディとして、「～と聞く」「～といらふ」「～と答ふ」を取り扱った。それぞれ「～と」の中に引用される語句の種類を精査し、次の結果を得た。

「～と聞く」は、“音声情報を聞いて現状を把握する”という意味を表し、主節時(聞く時)に把握した現状が「～と」に引用される。他者の言葉を情報源とするものとしての解釈が表立つのは文脈によって生じる含意ではないかと考えられる(発表論文)。

次に類義表現の「～といらふ」と「～と答ふ」に関して、「～といらふ」は働きかけを伴わない発言も含め、耳にした他者の発言に反応することを示すが、「～とこたふ」は質問・命令等の言語的な働きかけに対応することを示すことが分かった(その区別は中古後期には失われ、「～とこたふ」が「～といらふ」の表現領域を獲得していく)(発表論文)。

(2) 「～とて」について

「とて」は、従来の研究では「と言ひて」「と思ひて」などの「と+引用動詞テ形」と同義と見なされているが、両者を比較した結果、かなり表現性が異なることが分かった。見出された現象を以下に記す。

まず、「とて」は係助詞が後接する頻度が高く、係助詞が後接する場合、発言された音列を引用するというよりも、主節事態と関わる事柄を提示するものという解釈が出やすい。感動詞を受ける例や、複数の文といった独立性の高い要素を受ける例が見出しがたく、自立語を中心とする実質の意味を持ったひとまとまりに付くという統語的な制約が存する点も観察できる。「とて」は、後続する主節の事態を詳しく特徴付ける要素を受ける機能を持つと考えられる。

係助詞の付いた「とて」は、係助詞が付かない場合に比べ、終助詞や、係助詞・疑問詞の結びといった、文末に相当する位置にのみ現れる要素を受けにくく、逆に、文末に現れる要素としては周辺に位置づけられそうな、体言相当の要素を受ける要素を受ける例が多い。「～とて+係助詞」が意味的には地の文相当で、主節の事態と関わる事柄を示すという分析の傍証となる。

また、「とて」に係助詞が付く形のうち、しばしば古語辞典等で複合辞相当の扱いを受けている「とては」「とても」について検討すると、「とては」は、言いさしの表現を受ける用例が見出しがたい点で「は」の付かない「とて」と異なっており、「とても」は泣き出す時の発言を引く例に偏るといった特徴を持つ。係助詞の他に「とて」に後接する付属語として、指定辞「なり」・連体助詞「の」

があるが、この点は接続助詞「て」とかなり近い性質と言える。

形容詞語幹・感動詞・「か(疑問を示す終助詞)」、動詞終止形・「ぬ(完了の助動詞)」・活用語の命令形は、「とて」に対する前接要素としてしばしば生起するのに対し、ト+引用動詞テ形による引用語句の末尾として表れることは稀である。一方、形容詞終止形と「あはれ」は、「とて」に前接する割合はかなり低い、「ト+引用動詞テ形」にはしばしば前接する。

以上を踏まえて「とて」の基本的な用法分類を行うと、語句を引用して後続節に繋げるという中心的用法から、後続節内容に関わる事物を引用の形で示すもの、事物の名称を表すものが派生すると見ることが出来る。「とて」が、感動詞・形容詞語幹・活用語の命令形・「か」「ぬ」を受けやすい点は、言語化されないながらも後続節主体が心中に抱いた事柄を提示するという機能によるものと捉えることができるのではないだろうか。

「とて」は、後件事態に関わる事物を引用の形で示す機能を持つが、用例の解釈上、後続節の事物に関する名目・事情・資格・極限・日時といった種々の意味合いが表立つ。事物の名称を受けると解される「とて」は、後続節と関わる事柄ではなく、後続節に出る人物・事物の名を示すもので、語句を引用して後続節に繋げるという「とて」の基本的機能から派生しているものだろう。

(3)「など」について

「など」と「と」は、係り先の述部の語彙的な傾向が大きく異なる。次のように用語を定義し、「など」の機能に付いて分析を行った。

顕在語句：「など」に前接し、文中に示された引用語句。

潜在語句：事実上、顕在語句と同様に述部の示す発言・思考等の内容として存在しつつも、文中に示されず、含意される語句。

これを前提に、「など」と「と」の係り先の述部を観察すると、次の2つのことが判明する。

顕在語句と潜在語句は、同一空間で生じるが、内容の異なる言葉であること

顕在語句と潜在語句は、時間軸上の異なる位置で生じること

に関しては、次のことが根拠となる。第一に、「A、B、C...など」という形で顕在語句を列挙する例を観察すると、A・B・Cは同一空間に発せられた、内容の異なる語句である(複数人の心中の言葉が列挙されるような表現の例は無い)。第二に、事物に一つの

名称を与える意の「~と(名前を)付く」と、一首の和歌を詠む意で用いられる意の「~と詠む」は用例が多いが、「~など付く」「~など詠む」の例は稀である。第三に、知覚により現状を(一通りに)把握する意の「~と見る」「~と聞く」「~と見ゆ」の例は多いが、「~など見る」「~など聞く」「~など見ゆ」の例は少ない。

に関しては、次のことが根拠である。第一に、一人の人間が、異なる内容の言葉を同時に発することはできない。第二に、時間軸上でまとまった一つの事態を表す節に付く「ながら」が、「~と言ふ」「~と思ふ」に付く例は多いが、「~など言ふ」「~など思ふ」に付く例は稀である。第三に、眼前の一回的な事態であること(メノマエ性)を示す「たり」「り」が、「~と言ふ」「~と思ふ」に付く例は多いが、「~など言ふ」「~など思ふ」に付く例は少ない。第四に、「など」は「述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す」と解される引用構文を作ることができない。

(4)当初予期していなかった成果

引用助詞「と」は、「とて」「など」以外にも種々の複合辞を派生している。このことを考慮するため、複合辞について先行研究を参考にし、自身でも複合辞について考察を行ううちに、発表論文に示す成果に繋がった。格助詞「に」と動詞「添ふ」と接続助詞「て」が連なって一つの助詞として機能する「にそへて」について分析したものである。この論文においては、「にそへて」が、「添ふ」の本来持つ意味(物品を物品のそばに付け加える動作)から、心的な事象を付加するという意味へと、意味の中心を変容させている点などを記述した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

辻本 桜介、中古語におけるナドの引用助詞用法について、国語と国文学、査読有、95巻7号、2018、53-68

辻本 桜介、中古語における類義語イラフ・コタフの分析 共起する引用句「~と」に着目して、文学・語学、査読有、222号、2018、62-75

辻本 桜介、中古語の複合辞ニソヘテについて、藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院、査読無、2018、21-39

辻本 桜介、中古語の「~となし(無し)」について 体言・動詞終止形を受ける場合を中心として、米子工業高等専門学校研究報告、査読無、53号、2018、10-27

辻本 桜介、文相当句を受けるトナリについて 中古語を中心として、ことばとくらし、査読有、29号、2017、3-19

辻本 桜介、中古語のトテについて(三)

米子工業高等専門学校研究報告、査読無、
52号、2017、44-58

辻本 桜介、中古語のトテについて(二)
米子工業高等専門学校研究報告、査読無、
52号、2017、26-43

辻本 桜介、中古語のトテについて(一)
米子工業高等専門学校研究報告、査読無、
52号、2017、9-25

辻本 桜介、古代語における引用表現「～
と聞く」について、國學院雑誌、査読有、
118巻2号、2017、1-17

〔学会発表〕(計2件)

辻本 桜介、中古語の複合辞ニソヘテに
ついて、第13回形式語研究会、2017年
1月21日、於：愛媛大学

辻本 桜介、中古語の類義表現「～とい
らふ」と「～とこたふ」の分析、第36
回 山陰<知>の集積ネットワーク研
究会、於：米子市立図書館

〔その他〕

ホームページ等

<http://tsujimoto.webcrow.jp/top.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻本 桜介 (TSUJIMOTO, Osuke)

米子工業高等専門学校・教養教育科・助教

研究者番号：90780990